

【緑地を楽しむ本】

## 『自然のかくし絵—昆虫の保護色と擬態—』

矢島稔/作 偕成社



西緑地では以前、クヌギの木のまわりを網で囲ってヤママユを育てていましたが、最近はお各自家に持ち帰って育てています。4月初め、コナラやクヌギが芽生える時期

にあわせて孵化したヤママユの赤ちゃんは、葉っぱを食べてどんどん大きくなって、今では薄緑色のまるまるしたいも虫に育ちました。そんなに大きいのに、ともすると葉の陰に隠れて見えなくなるのです。緑の体色も葉の色にそっくりなうえ、体の真中を通っている筋は葉脈そっくり、よく見ると葉の鋸歯と同じような毛まで出ています。幼虫は葉っぱになりすましていたのです。

『自然のかくし絵』には、そんな「いませんよ、いませんよ」と言っている虫たちの写真がいっぱい。どこかに虫は隠れているらしいのですが、よほど目を凝らしてみないと見つかりません。木の幹にまつわるツタとしか思えないようなナナフシ、とげとしか見えないエダシヤクなども。どうしてこんなにじょうずになりすまず虫たちがいるのか、自然の奥深さを感じます。子どもたちも、「どこにいるかな」とパズルのように楽しんで探しますがなかなか見つかりません。見つけた時は、本当にうれしそう。

実際の自然の中では擬態している虫を見つけるのはもっともっと難しいでしょう。でも、見えなくても、きっといるのです。そう思うとわくわくしますね。（小川）

（表紙画像は偕成社の許可を得て掲載しています）